

# 青少年の心は変化しているのか

—日本における11年目のfsyで、アイリング管長の預言を考える—

リアホナ日本語版編集室

藤谷 清香

**fsy** 2020<sup>※1</sup>が新型コロナウイルス蔓延の影響を受け延期されて2年——今年8月、fsy2022として東京、名古屋、福岡での3セッションが開催された。

参加した青少年の最高学年である高校3年生にとっても、fsyは人生で初めての経験だ。

現代の青少年と聞くと、ヘンリーB・アイリング管長が19年前に預言したあの言葉を思い出す。「わたしは、日本に大いなる日が訪れることを約束しました。回復された福音の証を、出会う人々に熱心に語って聞かせる会員が著しく増えると語ったのです。……今、その偉大な奇跡、大きな変化が、会員の周りにではなく、会員の心の中に起きることを確信しています。」(2003年4月総大会)

11年前の夏、日本で初めて開催されたefy2011から、smyc2013、fsy2016、nyc2018と開催を重ねてきたfsy。アイリング管長の預言がグラデーションのように年々成就しているのなら、この11年を経た現在、青少年は人々へ福音をどのように語っているのだろうか。それを探るべく、fsy東京北・札幌セッション会場(東京・代々木の国立オリンピック記念青少年総合センター)で取材を行った。

## 友人や知人に伝えてありますか?

記者はまず、青少年にこう尋ねた。「あなたは、友人や知人に末日聖徒イエス・



東京北・札幌セッション



愛知・美浜セッション



福岡・神戸セッション

キリスト教会の会員であることを伝えてありますか? 伝えることに心の抵抗がありますか?」

話を聞いた15人中13人が、自分が教会員であることをよく友人に話しているという。石嶺 憩 姉妹(中2)は、自分が教会員だと友人に伝えるとき、教会の正式名称「末日聖徒イエス・キリスト教会」と、自分が神とイエス・キリストを信じていることを必ず伝えると話す。「いっぱい宗教がある

から」どの教会に自分が行っているか伝えるためだという。

また、青少年と8歳前後の年の差があるYSAのカウンセラー<sup>※2</sup>にも話を聞いたが、青少年時代に教会に行っていることをよく友人に話していたのは6人中2人だった。現在の青少年とカウンセラー世代の青少年時代にどんな違いがあるか、カウンセラーの藤谷友哉兄弟はこう話す。「教会のことについて変に緊張したりせずに自然と友達に接してるんだなって感じます。(教会員であることを)一つの自分の個性というか、自分を構成するものとして受け取っているから、(教会に行っていると伝えるのを)避けようとしてる感じはなくて、ポジティブに捉えているなって思います。」

## イエス・キリストを信じている

東京北・札幌セッションディレクターの笹山孝史兄弟は語る。「今回の青少年たちの証の中には、『イエス・キリスト』という言葉が多く出てきました。fsyの経験を通して、イエス・キリストに対する証や信仰を分かち合ってくれていたんです。それがすごく印象的でした。彼らは、主を近くに感じられる霊たち、主の再臨に向けて、主を証するために備えられている霊たちなのだ、と強く感じています。」

実務ボランティアとして、東京会場でバラエティーショーと音楽プログラムの照明を担当した竹下心也兄弟(60歳)は、舞

※1— For the Strength of Youth (若人の強さのために)と題する、中学2年生から高校3年生の5学年を対象に6日間にわたって行われる教育プログラム。キリストの教えを土台に、青少年のより良い人生設計を支援する

※2— YSAとはヤングシングルアダルト、18歳から30歳までの独身成人を指す。ここでいうカウンセラーとは、fsyを運営するYSA年代の指導者のこと。参加する青少年を兄や姉のように見守り、促し、相談に乗るなどのケアを行う





## Tokyo North/Sapporo Session

台・映像制作関連の専門学校講師であり、現場研修と手伝いを兼ねて学生たちを連れて来た。彼らからこの教会について尋ねられた竹下兄弟は、「何から説明したら良いのか……」と戸惑ったという。「知恵の言葉や什分の一について伝えましたが、後で、いかにも昭和的な答えだな、と思いました。なぜ、イエス・キリストの愛をたくさん感じられる教会だよ、といったふうに伝えられなかったのか、と。」

東京北伝道部のクック会長は、彼自身が専任宣教師として日本で伝道した頃を振り返る。「昔の日本人宣教師たちと比べて、今の日本人宣教師はイエス・キリストのことをより深く理解しています。『わたしを強くくださるかたによって、何事でもすることができる。』<sup>※3</sup>この聖句のようにイエス・キリストに頼ったら彼らは何でもできます。」主を信頼する。この言葉は、今年のfsyのテーマでもある。

クック会長と宣教師たちに強い感銘を受けていたのは多喜光希兄弟(高2)だ。「主のため、他の人のために、自分を捨てて奉仕ができるって本当にすごいなって。久しぶりにたくさんの宣教師たちを見て、その神々しさに焼かれる思いでしたね。」

光希兄弟はとても意欲的な印象を与える少年だ。しかし、fsyでたった一度のダンスパーティーのとき。体育館からポップな音楽と青少年たちの楽しそうな声が響き渡る中、壁1枚隔てた体育館の外で、彼はただベンチにポツンと座って2時間、パーティーが終わるのを待っていた。人とのコミュニケーションが苦手だという。

「光希」という名前には、世の光(イエス・キリストのよう)になってほしい、との母親の願いが込められている。でも、自分にはレベルが高すぎると感じてきた。それでもやっぱり、いつも主の御名を受けて、自分

と関わる人々が、「この人はイエス・キリストの教えを信じている人だ」と感じてくれるような人になりたい。——そう照れくさそうに心の望みを打ち明けてくれた。

### ためらわず伝える青少年

現代の青少年たちの中でアイリング管長の預言がどう成就しているのか知るために、5人の青少年を追跡取材した。

多喜光希兄弟は教会に行っていることを周りに公言している。「普通に『どこ(の教会に)行ってるの?』とか『どんなことするの?』って聞かれたりって感じです。学校で宗教を学んだときに、ほかと比較して『うちはこういう考え方で』って感じて簡単に話したりします。教会に行ってるって堂々と周りに言えているのは、自分でもすごくいいなって思いますね。」

小澤夢芽姉妹(高1)もはきはきとした口調で語る。「仲のいい子たちには(教会について)よく話します。言葉がきつい子とかだと、『何て言われるかな』って不安になったりはするんですけど、様子を見計らって言いますね。やっぱり、自分のことを知ってもらいたいです。」

三谷清華姉妹(高3)の場合、「友達がお茶とかコーヒーとか自販機で買うときに、『飲めないよ』っていうと『なんで?』って聞かれるので、そういうときに『教会に行ってるんだ』って。教会員って言うだけならそんなに勇気はいらないです。……『fsyに行くんだ』と言ったら、『そこで何するの?』『勉強したりするよ』『どんな勉強するの?』……といった感じで、ざっくり福音について話したりもします。」彼女は生き生きとした瞳で話し続ける。「教会の詳しい教えとかは、今はまだ仲のいい人にしか伝えられなかったんですけど。でも、fsyのおかげで、もっとみんなに『教会っ



て本当にいいところなんだよ』とか伝えられるようになったらいいな、って思えるようになりました。」

「多くの人にこの福音が与えられるようにわたしたち(教会員)には一人一人役割が与えられていて、神様の計画は完璧なんじゃないかな、って思います。」そう笑顔で語るのは糸数悌真兄弟(高3)。「教会という言葉を使うと、結構バイアス(先入観)があったりするんで、そういうフレーズを出す前になるべく行動で愛を示して、すばらしいものがあるってことを知ってもらいます。その上で、教会や福音があるんだよって伝えたりします。」

### 御霊を感じる青少年

悌真兄弟は初日、「自分のカンパニー<sup>※4</sup>を一つの家庭と考えて、カンパニーのメンバー一人一人が幸福を得られるように、彼らに関心と愛を示します」というメッセージに出会う。それは、「自分はあまりほかの人に関心を示すタイプではない」と思っていた彼の心に刺さった。それから毎晩、







## Aichi Mihama Session



## fsy 2022

セラーから感じたような、神様の愛を……学校の友人たちにも本当に……感じてほしいです。」

「御霊を感じる機会が多くありました。」  
水谷 尊 兄弟(高2)は fsy 期間中、レッスンや活動を通して自分が知らなかったことを知ることができたとき、「霊的に満たされた気がしました。それは御霊でしたね」と確信を持って語る。

尊兄弟は、小学6年生のときに宣教師と出会ってバプテスマを受け、その後、妹も、彼と宣教師の影響で改宗した。時々、教会員ではない母親も一緒に教会に集う。彼は、神の愛(御霊)を感じたら、それを教会員でない母親、また友人に話すという。「話せたときは、シェアしてよかったなって心から思えます。」

fsy を通して一番印象的だったことは? と問うと、「やっぱり、主の力を一番に感じました」と答える。普段かなり人見知りをして、見ず知らずの人に自分から話しかけに行くことがとても苦手だと語っていた尊兄弟。「主の力があつたから、自分から人に話しかけに行ったり、積極的に行動することができるようになっていました。」

記者(24歳)が青少年だった頃、教会に毎週集い、セミナーに出席している青少年の中にも、「御霊って結局何?」という疑問を持つ子は少なくなかった。一方で、福音を学び始めてからわずか5年ほどの16歳の少年は、すでに生活の中で感じる御霊に気づき、ためらいなくそれを話している。

### 聖文と青少年

尊兄弟は言う。「学校の友達に『なんでモルモン書を読むの?』って聞かれたら、読みたいから読むんだってただ伝えます。」義務ではなく、モルモン書を読むこ

とで「聖なる場所」に立ち続けられるのを自分の経験から知っているという。

小澤夢芽姉妹は、元々信仰心が強いわけでも聖文研究に熱心なわけでもなかった、と率直に語る。自分自身が変わる良いきっかけになれば、と思って fsy への参加を決めたという、そんな夢芽姉妹がうれしそうに報告する。「『道は備えられている』っていう言葉がすごく心に響いたんですよ。わたしはいつも、教義(聖句)を習っても『いや、こうかもしれないじゃん』って否定から入って、行動に起こしてなかったんですよね。だけど、しっかり道は整えられているからやってみなきゃ分かんないな、ってすごく感じました。」

一方で、教会員の家庭に生まれ、生活の中に福音があるのが当然と思っていた多喜光希兄弟は、fsy のクラスやセミナーを通して内面的な変化を経験したという。「よりしっかり聖文に思いを向けて、聖句の意味を考えるべきだって思うようになりました。元々、当たり前のように覚えていた聖句は知識的な理解だったけど、もっと一つ一つの教義に目を向けて、それを、経験を通して実感しようと求めて、祈って、というのが必要なんだあって。」それに気づいてから光希兄弟は、朝のセミナーや個人の聖文学習のときに、聖文をよく理解できるようにと祈り始めた。「その効果かどうかは分からないですけど、総大会の話とかを(fsy)期間中に読んでみると、より深く心に感じて、理解が深まって。成長したとまでは言えないけど、大きなきっかけ、最初の一歩にはなれたのかな。」

セッションディレクターの笹山ひかり姉妹はこう話す。「わたし自身が青少年だった頃と比べると、まさに取っておかれた霊が今 YSA として、青少年として育っていると感じます。「若いうちに知恵を得な

彼はカンパニー一人一人の名前を出して、彼らに祝福があるようにと祈り続ける。

三日目の晩、親しい友人がコロナウイルスの濃厚接触者となり途中帰宅を余儀なくされたと聞いて、悌真兄弟は強いショックを受けた。——翌朝、カンパニーの皆と共に聖書を読んでいて、ある聖句が彼の目に留まる。「わたしは信じます、生ける者の地でわたしは主の恵みを見ることを。」<sup>※5</sup>何か彼の心の鋭敏なところに触れた。目に涙があふれる。気づいたカンパニーのメンバーは、彼の背中を優しくさすった。「どうしたの?」とカウンセラーに問われる。「……この聖句のように、途中帰宅してしまう友人と一緒に信じていることができたらどんなに良いだろうかと思って。」

「友達思いなんだね」カンパニーのメンバーは口々に声をかけ、移動の間も、彼の歩調に合わせてゆっくりと歩いてくれた。「カンパニーのみんなから、心からの愛を感じました。」悌真兄弟は、涙が邪魔して声を詰まらせながらも、絞り出すように語った。「カンパニーのメンバーやカウ





## Fukuoka/Kobe Session

# fsy 2022

さい」※6 という聖句がありますが、彼らはしっかり聖句通りに行っていて、骨の髄まで福音が染みている印象があります。当たり前のように聖句を使って証をしたり、聖句を自分の人生に反映させたりしている……作用される者ではなく、作用する者になっています。」その背景には、特にこの十年間の教会のカリキュラムの変化もあるのでは、と笹山兄弟は指摘する。日曜学校では2019年から『わたしに従ってきなさい』が導入され、『救い主の方法で教える』ように大管長会は指示している。セミナーのカリキュラムも教え方も変化し、聖文の教義を生活に応用することを学ぶようになった。「青少年たちがすぐに伝道に出られるように教えています」とS&I※7 職員の時野兄弟は語る。

カウンセラーの時野祥子姉妹も口を揃える。「今の青少年は聖文をもっとよく読んでいます。わたしたちのときは、第一ニーファイ3章7節みたいな有名どころしか(笑)ぱっと出てこなかった、そういうレベル。でも、あの子たちはレアな聖句も結構知っています。」

### 「主に信頼せよ」※8 — 逆境の中で福音に生きる青少年たち

fsy 2022の各セッションでは一部で新型コロナウイルス感染者も発生し、青少年や指導者にとって大きな試練となった。四日目に帰宅させられることになったカンパニーではその前夜、濃厚接触者として一人一人隔離されてしまう直前のわずかな数分間に、「また絶対会おうね」と手を振り合いながら別れ、それぞれの隔離部屋へ向かう。ある兄弟は、電気が壊れた薄暗い部屋で、たった一人、久しぶりに声に出して祈った。聖文を読んだり、携帯で再生したユースミュージックを聞きながら、彼

は泣き続けた。

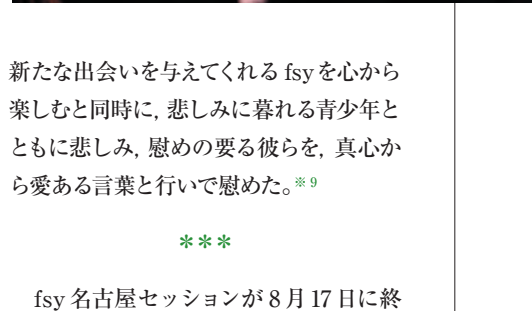
笹山兄弟は、今年のfsyのテーマ「主に信頼する」が、途中帰宅した青少年をはじめfsyに参加した全ての青少年にとって、とてもタイムリーに必要なテーマだったと振り返る。「とても理不尽な状況にあったときに、それを受け入れることはすごく難しい。それでも、その状況を永遠の目で見ようと努力し、これが御心だと知ることができた青少年たちがいました。本当に主に信頼しないと啓示は来ないと思います。彼らがつらい状況にあったときに主に頼って、祈り求めて、啓示を通して慰めや力を得ているところを目の当たりに見せてもらいました。」



5日目のカンパニーの証会の後、涙を流して別れを惜しむ青少年とカウンセラーたち(東京会場)

4日目の夜の証会で、ある青少年は、途中帰宅したほかの青少年たちの立場に立ったとき悲しくて泣いてしまった、と語った。ほかにも数人の青少年たちが続けて壇上に上がってそのことを話した。証をする前から泣いている青少年もいた。「ぼくは本当に自分のことしか考えない人間なんですけど、こうやって他人のことを考えさせてくれる機会っていうのは貴重で、それを与えてくれた神様に感謝しています。」(新野 和兄弟・高3) — その日、証会で証をした青少年の3分の1以上が、途中帰宅した青少年たちに言及し、「彼らに祝福があるように」と願った。

青少年たちは、自分を霊的に成長させ、



新たな出会いを与えてくれるfsyを心から楽しむと同時に、悲しみに暮れる青少年とともに悲しみ、慰めの要る彼らを、真心から愛ある言葉と行いで慰めた。※9

\*\*\*

fsy 名古屋セッションが8月17日に終わり、fsyに参加したすべての青少年が帰宅した直後、全国fsy委員会と地域会長会の意を受け、急遽、「fsy 2022 特別セッション」の開催が決まった。9月17日から19日の三連休、fsyへ参加できなかったり途中帰宅したりした青少年たちを集めて、東京・代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターで開かれる。

東京北・札幌セッションディレクターの時野祥子姉妹は、「出発点ではなく、どこに向かうか。イエス・キリストはわたしたちの出発点がどこであろうと、神聖な可能性を見ておられます」と語る。その可能性に向かう過程で、fsyで培った「主に信頼する」力を青少年たちがどう発揮するのか、これからが楽しみだ。◆



# しまんちゅ 先祖と一緒に島の人に仕える

宮古島におけるミニスタリングと家族歴史の力——あさとよしとか安里吉隆兄弟：沖縄ステーキ高等評議員



愛し、家族歴史をシェアし、招く  
—— Love Share Invite

風光明媚な「バイナガマビーチ」。ここで、  
今年の宮古支部4人目のバプテスマが行われる



金城つる子姉妹(右)の自宅を訪れた安里吉隆兄弟

**那** 覇より約300km 南西に下ると、大小6個の島からなる宮古列島が浮かぶ。その最も大きな島が宮古島だ。透明度の高いエメラルドグリーンの海や白砂の美しさに魅せられ、年間を通して多くの観光客がこの島を訪れ、豊かな自然やマリニアクティビティを楽しむ。

3年前、安里吉隆兄弟は沖縄ステーキ高等評議員に召された。担当するのは神殿・家族歴史で、エリアは宮古支部を任される。毎月1回、土曜日の朝早い便で

は、活発に集う会員が12～13人ほど、メルキゼデク神権者すながわたつやは砂川辰也支部会長一人という小さな支部だ。



宮古島のサトウキビ畑

を助けようとする人は誰でも……人生の諸事全般について助けを得られます」<sup>※1</sup>等、家族歴史に関する指導者の様々な言葉が心に迫ってきた。そういえば、安里家の多くの問題やチャレンジもまた、先祖の救いに携わる中で思わぬ主の助けを受け、乗り越えられてきた。——理解が大きく広がる。会員たちが必要としているのは人生の諸事全般の助けた。こんなすごい約束はない！これしかない！と思った。会員たちに家族歴史活動に参加してもらうことで、人生の諸事全般について主の助けを頂こうと、安里兄弟は決意する。

## 地道に続けた「打ち込み会」

安里兄弟は宮古支部の会員たちに、聖文を熱心に学び、聖約に忠実に生きようと励まししながら、家族歴史の手伝いを始めた。まず活発に集う会員と家族全員



宮古支部にて、砂川会長と安里兄弟

沖縄本島から宮古島まで飛び、一泊して日曜日の夕方の便で帰途につく。宮古支部

## 人生の諸事全般に助けを頂こう

訪問を重ねるにつれ安里兄弟は、会員たちが、身体面、精神面、経済面などで大きな試練を抱えていることを知る。苦しみの渦中にある彼らを、どうすれば励まし、強めることができるのか。個人的に助けている献身的な会員もいるが、より良い主の方法があるはずだ。何とか道はないものかと、来る日も来る日も考えた。

ある日のこと、「幕のかなたにいる人々

※1—ジョン・A・ウィットソー長老 ("Genealogical Activity in Europe", 104)





の教会アカウント※2を作成することから着手し、PAF※3以前から家族歴史に取り組んできた人には重複した名前を融合するなどのサポートを始めた。初めての人には、資料を取り寄せてもらい入力していく。ファイヤサイドも数回行き、先祖を助けたら天が開かれると証した。

「大切なのはその後のフォローです。」集会後の2～3時間は、「打ち込み会」と称し、会員たちが持ち寄った資料を入力する。経済状況が厳しく生活していくのがやっとの会員たちは、格安スマホを持つのが精一杯だ。パソコンも十分なネット環境もない。パソコンを持ち込んで行く「打ち込み会」を少人数でもこつこつと続けていった。

融合と入力を経て3年、830人以上の儀式可能な人々を見つけ、名前を神殿へ送ることができた。「宮古で800人の（死者のための）バプテスマがあれば（霊界に）400人の神権者が生まれます。400人が宮古に住む5～6万人を改宗へと導く、すごい援軍になるじゃないですか。」自分の家族や先祖だけでなく、求道者や隣人の先祖へも手を差し伸べ、神殿・家族歴史のすばらしさを証できるように、との願いも込める。17人だった教会アカウントは2021年末で72人となり（10数人は教会員以外）、3年間で9人が教会に足を運び、4人が毎週教会に集うようになった。

### 店の片隅で家族歴史活動を助ける

ちんすずこ  
知念鈴子姉妹は長年、宮古支部で神殿・家族歴史相談員に召されてきた。知念姉妹の自営業の店舗奥の戸棚には、親族や会員たちの家族歴史を整理した、何十冊もの家族歴史のファイルやノートが保管されている。

家族歴史に真剣に向き合ったのは、宮

古列島に大きな被害をもたらした2003年の台風14号がきっかけだった。最大瞬間風速74mの暴風で自宅の外壁ははがれ、割れたガラスと畑の泥が一緒に天井から降ってくる。すべての物が飛んでくる恐怖に怯え、死を覚悟したのを今も生々しく覚えている。誰かから聞いた「家族歴史をすれば守られる」との言葉を信じ、相次いで発生した台風の進路がそれるようにと祈りつつ、一心不乱に家族歴史に取り組んで夜を明かした。

鈴子姉妹は教会に改宗したことで親戚から嫌われていた。ところが2010年頃、親戚の20代の女性の夢に「知念のおばあ」が出てきたことで風向きは一変する。「みんな系図を調べれ。鈴子のところに行け」とのおばあからの言葉を聴き、親族はこぞって謄本を取り寄せ、鈴子姉妹に頼みに来た。祖父の祖母にあたる「知念のおばあ」は、知念家では不動の地位、絶対的存在だ。彼らの伴侶たちも謄本を持ってきたので膨大な数になったという。

鈴子姉妹は仕事が忙しく容易に店を空けられない。「最初から全部ここ（店内）でやってきました。」この店でアルバイトをしながら家族歴史を進めている会員もいる。手が空いたときは、パソコンを開いて家族歴史に取り組んでもらう。「わたしも助かりますから一石二鳥ですよ。」店の片隅での小さな時間を使った「打ち込み会」が、支部の家族歴史活動を支えてきた。

### 「沖縄に神殿が建ちますよ 先祖の救いはどうなっていますか お手伝いしましょうか？」

安里兄弟は、宮古支部の会員記録にあった158人全員に、自主制作の「沖縄神殿だより」とプロフィールを入れた手紙を送った。最終的に、宮古島に居住し



金城つる子姉妹の家族歴史を助ける安里兄弟



神殿・家族歴史相談員の知念鈴子姉妹のお店に保管されているたくさんの家族歴史ファイル

ていることを確認できたのは80人ほど。さっそくレンタカーを借りて、手紙が戻ってこなかった会員の家を軒軒訪問し始めた。当時宮古島で伝道していた高橋長老とニヴェーラ長老も、日本語で書いたはがきを全員に送り、安里兄弟と一緒に会員たちの家を巡った。住所を探し当てても、廃墟になっている家、本人は島を出て両親だけが残っている家もある。最終的に、会員とその子どもたちや家族を含めた80～90人に会うことができた。安里兄弟は「脈がある」と思ったら繰り返し訪問し、互いに心を開いて親しくなる。

そして“ゴールデンクエスト”、「沖縄に大きな神殿が建ちますよ。先祖の救いはどうなっていますか。お手伝いしましょうか？」を投げかける。良い返事をもたらえたら、教会アカウントを作成してもらい、入力を手伝っていく。かつて英会話に参加していた人、訪問するうちに知り合った人、会員の母親や、そばやおばちゃんも、この群れに加わった。

「3年間、ひたすら会員の家を回りました」と安里兄弟。彼は1回の宮古島訪問で、2日間かけて10数軒の家を訪問する。宣教師がコロナで去ってからは、すながわしゅう砂川 正



## 愛し、家族歴史をシェアし、招く —— Love Share Invite



三味線を弾く砂辺正子姉妹



安里兄弟が訪問するたびに「伝道に使って」と手作りのメッセージ用折り紙をくれる83歳の下地節子姉妹



伊良皆末子姉妹



られるように教会に足を運んだのだった。

金城姉妹の記憶によると、叔父夫婦は40年もの間離縁していたが、「一緒に墓に入ってはどうか」との親族の仲介により復縁し、晩年は再び夫婦として暮らしたという。なんと、あの夢の1か月前、2021年4月に叔父の金市さんは他界し、トヨさんの名前はファミリーツリーに未入力だった。叔母の懇願に応えるには、どうしても金城姉妹の力が必要だったわけだ。沖縄神殿が完成したら、真っ先にトヨ

いたときから教会に行きたいと望み、家族歴史へのチャレンジが、内気な自分を教会に向かわせたと打ち明けた。だから安里兄弟は、一度で結果が出るとは考えないで、何度も何度も会員宅を訪問する。

### 家族歴史と連動する伝道

英会話の生徒や会員の家族、友人など10数人も教会アカウントを作った。アンジェリーナさん、エレナさん、ノリンさんはそのうちの3人だ。宮古支部の会員であるアンジェリカ姉妹は3年ほど前、母親のアンジェリーナさん、妹の幸奈さん、いとこのノリンさんが宣教師からレッスンを受けられるよう助けた。3人は順調に信仰を育んでいたが、幸奈さんは進学のため福岡へ、アンジェリカ姉妹は仕事のため関東へ引っ越すことになる。バプテスマを切望していたノリンさんは、カトリック教徒の母ノルミタさんの猛反対でバプテスマを断念。宣教師、安里兄弟が皆が涙を流した。

次兄弟がレンタカーに同乗して案内する。彼は生まれつき体が不自由だが、会員の家をよく知っていて、帰りの飛行機の時間ぎりぎりまで島を巡って助けてくれる。

### 「主の軍勢に加わらなければ」

ある安息日の集会後、支部会長に頼まれて訪問したのが、20年ほど教会から足が遠のいていた金城つ子姉妹だった。色々あったのだろう、昔の話にしばし耳を傾けた後、その場で教会アカウントを作り、入力済みの約60人の名前を確認する。それから1年間、毎月の訪問を重ねた。

2021年5月の支部大会前日のことだ。金城姉妹は、数年前に亡くなった叔母のトヨさんが10年以上も前に亡くなった母親に、「わたしの儀式をしてちょうだい」としきりに懇願している夢を見る。叔母は随分昔に叔父の金市さんと離婚したため、近い関係でもない。なぜ自分に現れてそのようなことを言うのか不思議に思った。次いで、宮古島に多くの先祖の霊が群れ集まり、キリスト再臨の前の最後の戦いのために準備している夢が続いた。「主の再臨は近い。わたしも主の軍勢に加わらなければいけない。」翌日、駆り立て



安里兄弟の車に同乗して会員宅を案内する砂川正次兄弟

さんと金市さんの儀式をするつもりだ。

伊良皆末子姉妹との出会いも衝撃的だった。3か月連続で会えず、「沖縄神殿だより」やメッセージをドアに挟んで帰ることが続いていた。初めて対面した2年前の12月中旬、「いつもメッセージを残してくれた安里兄弟ですね」と笑顔で歓迎される。安里兄弟は、「1月の第1週にまた来ますから、戸籍謄本を取っておいたら、一緒にやりますよ」と励ました。年明けに宮古支部を訪れると、戸籍謄本を手に入れた。彼女は2～3時間かけて60人すべての入力を終え、以来、毎週教会に集っている。「教会に戻りたい気持ちがあり、ずっと神様のことが心にありました。」安里兄弟からの最初の封書が届



前列左から、アンジェリカ姉妹、ノリンさん、アンジェリーナさん。後列が宣教師と幸奈さん(右端)。2019年のクリスマスに

その後、ノリンさん家族も岩手へ引っ越してしまふ。安里兄弟は、彼らの80人以上の先祖の名前をファミリーツリーに入力し、アンジェリカ姉妹のアカウントで神殿に提出した。

2021年12月、ノリンさんは2年ぶりに宮古島へ一時帰省する。安里兄弟は、ノ



## 愛し、家族歴史をシェアし、招く —— Love Share Invite

リンさん、アンジェリーナさんと娘のエレナさんの4人でLINEグループを作り、宣教師によるオンラインレッスンが開始された。いよいよ彼女ら3人のバプテスマの時期が来たと判断した安里兄弟は、伝道部会長の許可を得て、2022年1月15日から16日、林長老とフィッシャー長老を連れて宮古支部を訪問した。

集会が始まる頃に教会へ入ってきたのは、かつてノリンさんの改宗に猛反対した母ノルミタさんだ。その場に緊張が走る。彼女はノリンさんの宣教師とのレッスンにも同席した。こんな状況下でバプテスマチャレンジはないと思われたが、宣教師はストレートに問いかける。「ノリンさん、あなたはバプテスマを受けたいですか?」「はい、受けたいです。」まっすぐに宣教師を見つめるノリンさん。岩手に行っても彼女の信仰は揺らぐことがなかった。バプテスマの許可をノルミタさんに求めると——「この子はわたしがだめと言っても聞かない。好きに任せます。」

### ミニスターリング 心の変化につながった親切な行い

ノルミタさんが娘のバプテスマに猛反対したのは、「どういう教会なのか分からず不安だったから。」これまでの人生で、だまされ、傷つけられた経験がたくさんあり、いつしか人を信じるのを恐れ、疑うようになっていた。ノルミタさんは病気の夫を支え、家族を養うために、午前中は清掃の仕事をし、午後からは農園で働く。ビニールハウスの中で野菜を栽培し、サトウキビの植え付けや雑草抜き、下葉落としや収穫の他、マンゴー農園でも働く。賃金は安く、どれだけ働いても家賃ですぐに消え、生活は非常に苦しい。母として子供の自立や幸福についても真剣に考えているので、ノリンさんの意思の強さも相まっ



温泉施設を借りて行われた1月26日のバプテスマ



左から、フィッシャー長老、エレナ姉妹、ノリン姉妹、アンジェリーナ姉妹、林長老



ハウス農園で働くノルミタさん(左)と妹のアンジェリーナ姉妹

て、母娘はしばしば衝突する。

ノルミタさんが岩手にいた2年間、宮古島の妹アンジェリーナさんの生活も極めて厳しい状況だった。フィリピン人の親族の強い結びつきの中、ノルミタさんは妹と電話で連絡を取り合い何でも話し合う中で、扶助協会会長の砂辺正子<sup>すなべまきこ</sup>姉妹ら教会員が親身になって妹を助けてくれているのを聞いていた。宮古島に戻り、経済的に困窮していたノルミタさんにも砂辺姉妹らの手は差し延べられた。住まいを世話し、生計を立てて自立できるようにと助け、進学をめぐる母娘げんかには、「バプテスマを受けていない親御さんも、子どものために御霊の導きを受けるよ。心静めて祈ってみて」とノリンさんを戒める。そして誰に対しても、「自分のことばかりではなく、先祖のこともしないと(人生の諸事全般に)

助けを得られないよ」と勧める。

ノリンさんは一刻も早いバプテスマを願い、家族から折に触れて神様について聞いてきたアンジェリーナさんと娘エレナさんも同じ思いだった。2022年1月26日、安里兄弟は再び宮古島へ飛び、ドイツ村にある温泉施設内で3人のバプテスマを見守った。バプテスマの様子は、宣教師大会で集まっていた原伝道部会長と福岡伝道部の宣教師全員にもオンラインで届けられた。

ノルミタさんは後日、砂辺姉妹と二人きりで話したいと告げ、「これまで信頼していなかった。ごめんなさい」と詫言した。してもらったことを思い出すだけで涙が込み上げるほど、今は深い信頼を寄せている。「神様を信じるのは一番いいこと。ノリンが教会に入ってよかったと思っている。ノリンは悪いことはしない。親を離れて自分でしっかり頑張っている。意思が強くて賢いし、優しい心もある。」娘のことも信頼している。

砂辺姉妹は2012年頃のある晩、「テサロニケ」という大きな文字が目飛び込んでくる夢を見た。翌朝、聖書を開いて、テサロニケ人への手紙を読んだ。「……小さな者を励まし、弱い者を助け、すべての人に対して寛容でありなさい。……お互いに、またみんなに対して、いつも善を追い求めなさい。」<sup>※4</sup> 彼女はこの言葉に引き付けられ、人生の指針としてきた。安里兄弟は言う。「この(愛の)働きなくして、絶対(ノルミタさんの)心は和らがなかった。教会員の親切な行いと、彼らの先祖の方々の愛と心を込めた祈りが、心の変化の大きな力になったのだと確信しています。」

安里兄弟は、信仰篤い聖徒たちが住むこの美しい島への毎月の訪問を楽しみにしている。◆